

瀬戸内海の船旅—遣新羅使人の歌

2019.10. 太田蓉子

万葉集・巻十五に、「天平八年 736年・遣新羅使の旅、その歌物語」（編集脚色・大伴家持）とでも題すべき歌群（145首）があります。

そこには、瀬戸内海の、航路と風景と旅の感慨を詠んだ歌が数多くあります。以下に記す長歌・3627番（歌群の50番目）は、『属物発思』（風物に付き従うことによって感懐を発して詠んだ）と題するもので、難波津から備中・玉の浦までの船旅、瀬戸内海航路の序盤をまとめるかたちで、遣新羅使人の立場で詠まれています。これは、大伴家持自身の作であろうと言われますが、歌の出だしと全体の語調は、飛鳥藤原時代の官人・丹比真人笠麻呂たちひのみとかさまろの「筑紫国に下る時に作る歌(巻4・509番)」の詠み方を踏襲しているように見えます。

五・七・五・七と71句も続く長歌に区切りを付けて意識し、この船が通過した当時の摂津・播磨の入江を想像しながら、少し膨らませて紀行文にして見ました。

「朝されば 妹が手に巻く 鏡なす ^{みつ}御津の浜びに

朝になると妹が手に取る鏡、その鏡の中に“妹の顔を見つつ”とでも言おう、御津なる難波の港より出発する。

難波津(大阪府中央区・高麗橋付近)は、御津、大伴の御津(大伴氏の領地があるゆえ)とも呼ばれ、国の最も重要な港だ。三年前には遣唐使の船団が、大勢の人に見送られて出航している。

大船に ^{まかじ}真槿 ^ぬしじ ^貫き ^{からくに}韓国に 渡り行かむと

我らも今、大型船の舷に、左右揃えた櫂をいっぱいに取り付けて、朝鮮・新羅国へ渡航せんとする。

^{ただ}直向かう ^{みぬめ}敏馬をさして

武庫の泊(武庫川河口)には寄港しないで、まず、まっすぐに敏馬の浦 ^{みぬめ}(神戸市灘区岩屋、敏馬神社付近)を目指す。摂津の港湾管理人が見守る大きい港だ。

潮待ちて ^み水脈 ^を引き行けば 沖辺には 白波高み

敏馬の港で一夜停泊ののち、潮の流れが良くなるのを待って、水路に乗って進んで行くと、沖の方は荒れて、白波が高く立っている。

^{うらみ}浦廻より 漕ぎて渡れば 我妹子に 淡路の島は 夕されば ^{くもい}雲居隠りぬ

仕方なく、大和田の浜や須磨の浦の中にある小さな浦々伝いに渡って行くと、“妹に会う”という淡路島は、夕方になるともう雲の向こうに隠れてしまった。

小夜更けて 行くへを知らに 我が心 明石の浦に

やがて夜が更けて、行き先が分からぬ不安のままに、“心は明し”ではないのだが、ようやく明石の浦にたどり着いた。

船泊めて 浮寝をしつつ 海神の 沖辺を見れば

明石の門とより先はもう畿外であり、国による港湾管理は及ばない。船を泊めてゆっくりと一夜を明かすことにする。船中で、波にゆられて横たわりながら、海神が住むという沖合に目をやると、

漁りする 海人の 娘は 小舟乗り つららに浮けり

漁をする海人乙女達が、なんと、この時刻に小舟で沖へ出て、波間に連なって浮いているではないか。

暁の 潮満ちくれば 岸边には 鶴鳴きわたる

波にゆられてまどろんでいると、暁(夜明け前のまだ薄暗い頃)になって、潮が満ちて来た。すると、鶴の群れが岸边に向かって一斉に鳴き渡って行く。

朝風に 船出をせむと 船人も 水手も声呼び

この朝風のうちに、船出しようとして、船頭も水夫も一斉に声を掛け合う。

には鳥の 鳴づさひゆけば 家島は 雲居に見えぬ

カイツブリのように波にもまれながら印南の海いなみのうみ(播磨灘)を進んで行くと、(藤江の浦では漁をする舟が数多く、名寸隅なきすみ(明石市魚住)の岸には舟が何艘か泊っているのが小さく見える。)そして、とうとう、あの家島が雲の向こうに見えて来た。

我が思へる 心なぐやと 早く来て 見むと思ひて

この家恋しい心が慰められるであろうと、早く家島にたどり着いてゆっくりと見たいと思い、

大船を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ

大船を我れら一心に漕いで行くのだが、あいにく沖の波が高く立ち来て、遮られ流されてしまう。(家島ばかりでなく、播磨の浦々、飾磨川(船場川)、都太の細江、

室の浦^{むろのうら}、縄の浦^{なわのうら}（相生湾）その崎^{さき}へも、近づけない。）

外^{とと}のみに 見^みつつ過^{とと}ぎ行き 玉^{たま}の浦^{のうら}に 船^{ふね}を留^{とど}めて

やむなく、慕^こわしい家^{いへ}島^{しま}は遠^{とほ}くから見るばかりで過^{とと}ぎ行く。

（備^ひ前の海^{のうみ}（大^お伯^お海^{のうみ}）の島^{しま}々^々の間^まを渡^{わた}り、ようやくにして、夕^ゆ照^{じょう}が美^うしく映^{うつ}える入^い江^え・牛^う窓^{まど}に到^{いた}着^{ちやく}した。そして、翌^{あした}日^ひ、備^ひ中^{ちゆう}の海^{のうみ}へと漕^こぎ出^でし、）とうとう、神^{かみ}の鎮^{ちん}座^ざする玉^{たま}の浦^{のうら}（干^か潟^{がた}に幾^{いく}つか小^こ島^{しま}があり、島^{しま}々^々に神^{かみ}社^{しゃ}があつた。現在の倉^{くら}敷^し市^し玉^{たま}島^{しま}地^ち域^い）に船^{ふね}を留^{とど}めることが出来^{でき}た。ここ^こで、あ^あら^あた^あめ^あて^あ航^{かう}海^{かい}の安^{あん}全^{ぜん}を祈^{いの}願^{ねん}しな^なければなら^らない。

浜^{はま}辺^べより 浦^{うら}磯^{いそ}を見^みつつ 泣^なく子^こなす 音^ねのみし泣^なかゆ

浜^{はま}辺^べに降^{くだ}り立^たつて、遠^{とほ}く^の島^{しま}影^{かげ}を眺^{なが}めてい^いると、それ^{それ}が家^{いへ}島^{しま}の浦^{のうら}や磯^{いそ}のよう^{よう}に思^{おも}えて、子^こ供^{ども}が泣^なくよう^{よう}におい^{おい}と泣^なけてく^くる。家^{いへ}に居^いるよう^{よう}な気^き分^{ぶん}にな^なるとして名^な付^つけら^られた「家^{いへ}島^{しま}」を、今^{いま}度^ど何^{なに}時^{とき}見^みられ^らるかど^どうか分^わか^から^らないのだ。

海^{わたつみ}神^の 手^た巻^まき^の玉^{たま}を 家^{いへ}づとに 妹^やに遣^やらむと 拾^{ひろ}ひ取^とり 袖^{そで}には入^いれて

せめて、海^{わたつみ}神^のが手^たに巻^まくとい^いう白^{しろ}玉^{たま}（真^ま珠^{しゆ}）を、玉^{たま}の浦^{のうら}から家^{いへ}へのみ^みやげに、妹^やに送^{おく}つてや^やらうと、拾^{ひろ}い取^とつて袖^{そで}に入^いれてはみ^みたもの^{もの}の、

帰^{かへ}し遣^やる 使^{つかひ}なければ 持^もてれども 験^{しるし}を無^なみと また置^おきつるかも」

都^{みやこ}に帰^{かへ}しや^やる使^{つかひ}いの者^{もの}もい^いない^{ない}ので、持^もつてい^いても役^{やく}に立^たた^たない^{ない}と、また放^{はな}つてしま^まつた。

注1 下^{した}線^{せん}を引^ひいた詞^{ことば}は、先^まに詠^よまれ^た歌^{うた}や、古^{ふる}歌^{うた}など^を踏^ふま^えてい^いる^{ところ}。

注2 黄^き色^{いろ}く塗^ぬつた地^ち名^なは、万^ま葉^は集^{しゆ}の他^{ほか}の巻^{まき}・羈^か旅^{りよ}の歌^{うた}など^{にも}詠^よまれ^てい^いる^地。

注3 古^{ふる}代^たの撰^{せん}津^つ・播^は磨^まの海^{うみ}岸^{かた}線^{せん}は、現^{いま}代^たのJ^にR^の神^{かみ}戸^と線^{せん}・山^{やま}陽^{やう}本^{ほん}線^{せん}沿^まい^りの^{位置}であ^あつ^たと見^みられ^てい^いる[。]

歌^{うた}から^は、出^で立^だの意^い気^き込^こみ^や高^{たか}揚^{やう}感^{かん}は、殆^{たいてい}ど見^みられ^ませ^ん。初^{はつ}句^くから、妻^{つま}を思^{おも}う^詞が表^{あらわ}れ、全^{ぜん}体^{たい}的^{てき}に、郷^{きやう}愁^{しゆう}に満^みち^て哀^あ調^{てう}を帯^たび^たもの^{もの}にな^なつてい^いま^す。

今^{いま}回^{かい}、その理^り由^{ゆう}と、この歌^{うた}に對^{たい}する作^{さく}者^{しや}の思^{おも}い（意^い志^し）を考^{くわ}え^て見^みま^した。

当^{たう}時^じは、旅^{りよ}の途^と上^{じやう}では、その土^{つち}地^ぢを褒^ほめる^{こと}、そ^して、後^{あと}に^{して}来^きた家^{いへ}卿^{けい}を思^{おも}慕^ぼする^{こと}が、無^む事^じの帰^{かへ}還^{えん}が叶^かう^{こと}につな^なが^{ると}信^{しん}じ^られ^てい^いた。それ^{それ}故^{ゆゑ}、風^{かぜ}物^{もの}に触^ふれ故^{ゆゑ}郷^{きやう}を懐^{なつ}かし^み妻^{つま}や恋^{こひ}人^{ひと}を慕^ぼう^歌を詠^よう。それ^{それ}が、旅^{りよ}の慣^なわ^しであ^あつ^たと^言われ、この^{こと}は、万^ま葉^は時^じ代^{たい}の旅^{りよ}の歌^{うた}につ^ついて^の通^{つう}説^{せつ}とな^なつてい^いま^す。

それに加えて、思うのですが、危険が多く困難な旅の途上では、なかなかよい歌は詠めないのではないかと、旅先では、先人の詠んだ歌や、その替え歌風なものを作って唱(誦)うたったのではないかと。自分自身の歌は、帰宅してから練り直して完成させ、披露すれば、それを後の人が旅において誦ってくれる筈だと考えていたと思うのです。旅の「歌」は、何処で詠まれたか、何時詠まれたかに関わらず、同じ道を旅する人皆の無事を願う「祈りの詞」でもあった、故に、過去と現在、未来の旅人をも、引き合わせ交歓させる力を持ち得たと思われます。この歌も、同じ考えでもって、過去の遣新羅使人の旅を今に体現して、見せているのだと思うのです。

(歌詞は総て、一字一音式の万葉仮名で書いている。例えば「多麻能宇良尔」は、声に出して読んで初めて「玉の浦に」との意味が分かる。耳で聞いて覚えて唄う歌を、志向したとも見える。)

また、この歌が哀調を帯びる更なる理由は、この歌物語の主人公である使人たちが遭遇した「悲劇」にあると思われます。

“天平8年の使人たちは、険悪になった新羅国との関係を改善するという重い任務を帯びていた。ところが、航海は悪天候に見舞われ、朝鮮の港に着くまでに三か月も掛かり、上陸はしたものの、正式な外交使節とはみなされず、結局、任務は果せなかった。そして、無念を抱きながらの帰途に、大使は対馬で死亡。乗組員に天然痘が流行り副使も感染し、帰国も報告も遅れてしまう。”(「続日本紀」などによる伊藤博「釋注」等、より) この事情は、使人に成り代って歌を詠もうとした家持の筆に、一層物悲しさを加えたと共に、“船旅の辛い時に、旅人が口ずさんで慰みにしてくれる「歌」にしたい”との気持ちを一層掻き立たせと思われるのです。

(家持20歳の時の出来事であるが、40歳以降になって、遣新羅使の記録資料を読む機会があった、作歌したものと思われている。)



坂本・毛利 編「万葉事始」・万葉地図より

マピオン地図検索 「古代の瀬戸内海航路と潮流」より